オルケストラ　シンフォニカ　東京

第 35 回

定　期　演　奏　会

平成 6 年 4 月19日（火）午後 7：00 開演

浜　離　宮　朝　日　ホ　ー　ル

プログラム

第 1 部　　指揮：石　黒　不二夫

北の組曲より 雪　原	飯　田　三　郎
第　一　前　奏　曲	大沼　哲（サトル）
大　漁　：　豊　年	武　井　守　成
イ　調　の　序　曲	堀　　清　隆

第 2 部　　指揮：山　本　雅　三

コ　ラ　ー　ル　No. 147	J. S. バ　ッ　ハ （編曲：S. ダゴスト）
二つのメヌエット	J. S. バ　ッ　ハ （編曲：K. ヴェルキ）
ア　ダ　ー　ジ　ョ　ト短長	T. アルビノーニ （編曲：R. マチュー）

〔休　憩〕

第 3 部　　指揮：石　黒　不二夫

詩劇付随音楽　ペールギュント　　E. グリーグ（編曲：赤城　淳）

朝
オーゼの死
アニトラの踊り
山の魔王の宮殿にて
アラビアの踊り

ソプラノ独唱：須　郷　直　美

ソルヴェーグの歌
ソルヴェーグの子守歌

曲　目　解　説

第 1 部

北の組曲より「雪原」　　飯　田　三　郎（1912～　　）

大ヒットした大衆歌謡「こゝに幸あり」の作曲で名高い作者が、初めてマンドリン　オーケストラの為の「北の組曲」を作曲されOSTに贈られた。組曲は　漁期・古譚・雪原の三章よりなり、雪原は北海道オホーツク海沿岸の流氷と雪原をモチーフとして画かれている。
作者のことば……マンドリンは最も身近な楽器であり、私も郷里に在る頃マンドリン合奏を楽しんだものである。高田三九三さん（詩人・童謡作家・OSTメンバー）の要請もあり、郷愁とマンドリン　オーケストラの振興をも込めて作曲した。
作者の略歴：大正元年北海道　根室に生れ、上京して和声法・作曲法・指揮法などを学び作曲指揮に活躍。現在キングレコード専属、日本著作権協会理事。管弦楽　「バリ島組曲」「蝦夷キリシタンの殉教」「交響的叙事詩・大湿原」「序曲21世紀へのメッセイジ」、内閣総理大臣賞「若い日本」ほか作品多数。

第一前奏曲　　大　沼　　哲（サトル）（1889～1944）

武井守成をして「楽界の生んだ天才の一人・作曲界の一権威者・指揮者としても超一流」と絶賛せしめた我が国音楽界の先覚者　大沼　哲の歿後50年に当り、この曲を演奏して彼を偲ぶ　よすがと致します。
作者は山形県米沢の出身で、陸軍戸山学校軍楽部に在職の傍、大正7年頃　武井守成と親交を結び、大正11年OSTに入会、大正13・14年には指揮者となったが、その後フランス留学の為退会。帰国後は軍楽隊の指揮・作曲に活躍したばかりでなく、一般音楽界にも多大の影響を与えた。
この曲はMO曲としては処女作といってよく大正12年5月に作曲されたが、当時のドビュッシー・ラヴェルに代表されるフランス近代音楽の影響を受けたことは容易に想像され、その幻想的な曲想は現代にも通ずるものがある。作曲は吹奏楽・管弦楽が主で、マンドリン曲は失われたものもあり、現在3曲が残されている。

大漁 op45：豊年 op35　　武　井　守　成（1890～1949）

この2曲は姉妹編といわれるが、OSTで2曲が同時に演奏されたことは過去に1度しかない。それは昭和15年5月の、大漁が作曲された直後のOST第41回定演で、作者自身の指揮で演奏された。その時の作者の解説は次の通り……「豊年が昭和5年に成り翌6年に訂正完成してから既に8年、漸く本年（1939）4月長年の自分への責を果して大漁は成った。いづれも極めて短いもので勿論戯作として眺めて戴きたい。」
戯作とは辞書によると“たわむれに作った作品”とのこと。しかし作者の言う戯作とは、この2曲が昭和初期の農村漁村を民謡風に画くというテーマは同じでも、その旋律・テンポ・リズムに極端な差があり、そこに戯作的な（こっけいな、　しゃれた）面白さを感じ取って貰いたい……ということか。つまり作者はこの2曲を連続した1曲と見ていたのかも知れない。

イ調の序曲　　堀　　清　隆（1900～1986）

昭和2年（1927）の作。当初ハ長調で書かれたが後にイ長調に改められた。大正14年OSTに入会しているが、入会後“舞曲　陽炎”の次に作曲した作者にとっては初めての大曲（375小節）で、当時のOSTの編成を基準としているので、通常の7パートにフルート・クラリネット・マンドラ　コントラルト・ピアノに打楽器を加えた大編成としている。6/8長調・2/2短調の美くしい旋律と、可能な限りの音をちりばめた華麗なオーケストレーションの完成は、彼にとって大きな自信となり、これ以後の成熟期に向う作曲に堀式技法として定着したものと思われる。

第 2 部

コラール　No. 147　　J. S　バ　ッ　ハ（1685～1750）
二つのメヌエット　　〃　　〃

バロック音楽を集大成した音楽界の巨星　大バッハの作品から、イージー　リスニングとしても人気の高い小品2曲です。
コラール：ドイツのプロテスタントの賛美歌のことで、このコラールは教会音楽としてバッハが作曲した200にも　の

ぼる教会カンタータの中のNo. 147に含まれ、「主よ、人の望みの喜びよ」の名で特に親しまれています。

二つのメヌエット：バッハが彼に献身的に仕え　協力してくれた16才年下の妻に贈った「アンナ・マグダレーナの為のクラウヴィーア小曲集」に収められた曲です。明るく軽やかな第1メヌエット、それと対照的に落ちついたメランコリックな第2メヌエットからなっています。

アダージョ　ト短調　　T. アルビノーニ（1671～1750）

アルビノーニはイタリアのベニスに生れたヴァイオリン奏者・作曲家です。50曲ほどのオペラを作曲していますが器楽作曲家としての評価が高く、バッハも彼のテーマによるフーガを書いています。このアダージョは今世紀になってから、イタリアのレーモン・ジャゾットがアルビノーニの作品の未完成の断片から編作し、その美くしく甘い旋律で人気を集め、有名になりました。

第 3 部

詩劇付随音楽：ペールギュント　　E. グリーグ（1843～1907）

ペールギュントはノルウェーに昔から伝わる伝説的な人物です。ノルウェーの世界的文豪イプセン（1828～1906）は1867年39才の時、このペールギュントを主人公として、冒険好きなノルウェー人の国民性を象徴的に描いた叙事詩を書き、更にこの詩を5幕物の詩劇に書きかえた。1874年1月イプセンはこの劇の付随音楽を当時31才の青年作曲家　グリーグに依頼した。グリーグは最初は自分の抒情的な音楽が、この劇音楽には不向きだと考えて乗り気ではなかったが、無名のグリーグが文豪イプセンと名を連ねる名誉と多額の報酬は大きな魅力であり、この仕事を引き受け18ケ月かけて22曲の劇音楽を完成した。
この劇の初演は1876年2月クリスチャニア（オスロ）の国民劇場で上演され、大好評を拍しこの年に36回も上演されたといわれる。今ではこの劇はすっかり忘れ去られ、グリーグの音楽だけが演奏されている。

ペールギュントは豪農の一人息子でした。父親が財産を使い果して亡くなった後は、母親オーゼと貧乏でみじめな暮しをしていましたが、怠け者で常軌を逸した行いをしていながら、「帝王になる」など将来の大成功を空想しているばかり。
そのようなペールにも、心を寄せるソルヴェーグという純情な乙女がいましたが、彼の心はやさしいソルヴェーグのもとに留まらず、さまざまな女性を遍歴します。　村の娘イングリッドの花嫁姿に心を奪われ、山の魔王の娘に心を移し、又アラビアをさまよって酋長の娘アニトラの魅力のとりこにもなります。最後にペールは新大陸アメリカに渡って金鉱を掘り当て、巨大な富を得て故郷に帰る途中、嵐のため難船し、無一物となって故郷の村に辿り着きます。
そこには白髪の老女となったソルヴェーグが、変らぬ愛をもって、ペールの帰りを待っていたのです。ペールは彼女の膝を枕に疲れ果てた体を休め、彼女の歌う子守歌を聞いて、はじめて永遠の安らぎを覚えるのでした。

これがイプセンの劇の“あらすじ”です。イプセンは……男性が真の救いを得るのは、女性の永遠の愛情によるのだ。……ということを表現したかったのです。
グリーグはこの付随音楽の中から、4曲づつ8曲を選んで二つの演奏会用組曲を編成しましたが、本日は第1組曲の4曲、第2組曲より2曲、そして最終曲の子守歌を加え7曲を演奏します。編曲は、赤城　淳氏がこの演奏の為に、新に編曲されたものです。

朝（Ⅰ～1）←（これは第1組曲の第1曲目を表します。以下同様・Ⅱは第2組曲）
第4幕への前奏曲。モロッコ海岸の朝の情調を現すもので劇の筋に関係なく、清々しい朝の気分に満ちているだけです。

オーゼの死（Ⅰ～2）
第3幕、母親オーゼの死の場面で奏される。魔王の娘の呪いから逃れる為、ペールは同棲していたソルヴェーグには黙って母親のもとに帰るが、老母オーゼは死の床についていた。悲しみに溢れたアンダンテは古今の葬送音楽中の傑作の一つといわれています。

アニトラの踊り（Ⅰ～3）
第4幕、アラビアの酋長の天幕の場。酋長の娘アニトラがペールの為に官能的なソロを踊り、誘惑する場面でマズルカ風に書かれています。ペールは彼女の手管にかゝって全財産を失ってしまいます。

山の魔王の宮殿にて（Ⅰ～4）

第2幕、物語りを遡ってオーゼの死の前、村の娘イングリッドをさらっておきながら彼女に嫌気がさして山中をさまよう内に、魔王の娘に恋されたペールは結局結婚を断るので、怒った魔王の家来の魔物たちに殺されかゝる場面の音楽。低音弦がこのグロテスクな場面をよく表現しています。

アラビアの踊り（Ⅱ～2）

第4幕、母親を失ったペールは、富と冒険を求めて船乗りになり金持になるが、モロッコで山師のため財産を巻き上げられ、そこで今度は予言者になりすましてアラビアに入り一財産を作り上げる。ペールを迎えたアラビアの娘達は歌い踊って彼を歓迎します。異国情緒に満ちた音楽。

ソルヴェーグの歌（Ⅱ～4）

この有名な歌は劇中3回演奏されます。まず第3幕の森の中の小屋で、ペールとソルヴェーグが語り合う場面で、管弦楽だけの演奏。次は第4幕、アニトラに財産を騙し取られた後故郷の夢を見ると、その夢の場でソルヴェーグが紡車を廻しながらこの歌を歌っているのです。最後は第5幕、ソルヴェーグがペールの帰りを待ちながら、今度は無伴奏で歌うのです。

愛するペールの帰りを待ちわびるソルヴェーグの思いを切々と歌いあげ、清らかさと憂いをおびたこの歌は世界中の人に愛唱されています。

ソルヴェーグの子守歌

劇中の最終曲。疲れ果てたペールはソルヴェーグの歌う子守歌を聞きながら永遠の眠りにつく。愛情のこもった美くしい歌です。

須　郷　直　美

1968年東京生れ。　1993年東京芸大 音楽学部 声楽科卒業の新進ソプラノ歌手。

1992年ロッシーニ生誕200年国際オペラ コンコルソに最年少で入賞（順位なし4名）、同年イタリア ペーザロでのアカデミア・ロッシアーナの研修に参加。1993年7月NHK洋楽オーディションに1位合格。本年1月 NHK・FMフレッシュ リサイタルに出演。3月 文化庁インターンシップ研修を終了。着々と躍進への基礎を固めると共に、オペラ・リサイタル・教会でのオラトリオ・賛美歌・NHK放送に出演して活躍中。

ミラノ・スカラ座 芸術監督アルベルト ゼッダ・新田光信・平田恭子・大谷冽子に師事。

昨年サントリー小ホールでのOST第34回定演にて、イタリアのカンツォーネを歌い好評を拍す。

加除式法規書・法令解説書出版

中央法規出版株式会社

本　社　〒151 東京都渋谷区代々木2－27－4　電話（3379）3861（代表）
営業所　　札幌・仙台・岐阜・大阪・広島・福岡

山本ミュージックコーナー

〒164 中野区東中野1－43－7　JR東中野駅東口南下車3分　TEL（3363）9893

取　扱　品　目

★手工マンドリン・ギター各種
★各社マンドリン・ギター
★マンドリン・ギター用弦及附属品

お気軽にお立寄り下さい。

マンドリン教室
平　山　英三郎　先生

ギター教室
平　山　英三郎　先生

指揮	＊石黒不二夫	コンサートマスター	＊肥沼成明	
	＊山本雅三		＊本間輝樹	
第一マンドリン	肥沼成明	新居裕久	幸田禎治	桑原功
	本間輝樹	秋元興光	田島明子	村上一二郎
第二マンドリン	宮崎泰行	後藤俊明	山崎悦子	横内ふさ子
	＊岡田茂	深澤秋芳	坂井美佐子	道家矩子
マンドラ コントラルト	＊岩片順子			
マンドラ テノール	岩片順子	石井栄一	藤田正美	佐藤一徳
	田中倭文子	渡辺清	玉木利恵子	
ギター	＊今津章	宮本紀子	西原正	沢田行雄
	山本雅三	城所敏雄	高橋悠介	
マンドチェロ	鈴木功	平山英三郎		
リュート	＊宮本皓永			
マンドローネ	高田三九三	＊家城孝治		
コントラバス	佐藤正	久保田聡		
フルート	若土祥子			
クラリネット	佐藤道世			
ピアノ	福田りさ			
打楽器	横田大司			

〔＊――役員〕

オルケストラ シンフォニカ 東京（OST）
代表幹事 今津 章
事務所：〒241 横浜市旭区中尾町82－1 ☎045－363－1046